

Nara Women's University

No.011

メタデータ	<p>言語: Japanese</p> <p>出版者: 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター</p> <p>公開日: 2014-09-22</p> <p>キーワード (Ja): シンポジウム 「ジェンダーとパフォーマンス」, シンポジウム「軍事施設と女性のくらしー古都奈良の記憶から祈りをこめてー」, プロジェクト研究「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査III」報告 校史資料調査, 帰国留学生ヒアリング調査1「知を求めて世界に羽ばたいた留学生ー王興栄女史」, 帰国留学生ヒアリング調査1「知を求めて世界に羽ばたいた留学生ー王興栄女史」, 講演会「若者に何故HIV感染が広がっているのかー性的指向と健康問題」, 特別展示「沖縄の戦後と女性のくらしー古都奈良の記憶から祈りをこめてー」</p> <p>キーワード (En):</p> <p>作成者: 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	<p>http://hdl.handle.net/10935/3806</p>



アジア・ジェンダー文化学研究センター第11号 目次

● 特別展示 「沖縄の戦後と女性のくらし—古都奈良の記憶から祈りをこめて—」	1	● 2011年 奈良女子大学女性教員数	11
● シンポジウム 「軍事施設と女性のくらし—古都奈良の記憶から祈りをこめて—」	5	● プロジェクト研究 「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査Ⅲ」報告 校史資料調査	12
● シンポジウム 「ジェンダーとパフォーマンス」	8	● 帰国留学生ヒアリング調査①	16
● 講演会 「若者に何故HIV感染が広がっているのか—性的指向と健康問題」	10	● 帰国留学生ヒアリング調査②	18
		● 2011年度のセンターの活動と編集後記	20

センター特別展

沖縄の戦後と女性のくらし —古都奈良の記憶から祈りをこめて—

アジア・ジェンダー文化学研究センターでは、沖縄市の後援のもと、平成23年7月23日(土)～8月7日(日)の16日間、本学記念館(旧奈良女子高等師範学校本館)において、「沖縄の戦後と女性のくらし—古都奈良の記憶から祈りをこめて」と題する特別展を開催した。展示したのは、沖縄市役所総務部総務課(市史編集担当)が蒐集した沖縄の戦後のくらしを物語る生活用品と、米軍基地周辺の地域社会の変遷を記録した貴重な史料や写真パネルである。さらに奈良女性史研究会の協力により、朝鮮戦争時期の1952年5月から53年の9月末まで奈良に設けられていた帰休兵のための米軍施設「奈良RRセンター(NARA Rest And Recuperation Center)」とその周辺に出現した歓楽街の実態、およびそれらをめぐる地域社会の葛藤が知られる資料や同研究会が蒐集整理した『大和タイムス』(現在の奈良新聞社)の報道記事を、奈良新聞社の同意を得て展示した。

また、展示期間中の7月29日(金)に、本学教養科目「ジェンダー論入門」特別講義として、伊敷勝美氏(沖縄市役所総務部総務課市史編集担当)と松村徳子氏(奈良女性史研究会会員)による講演会「軍事施設とジェンダー—沖縄と奈良を例として—」を実施。さらに7月30日(土)には、一般公開のシンポジウムとして「軍事施設と女性のくらし—古都奈良の記憶から祈りをこめて—」を開催した(5ページを参照)。

奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター特別展
平成23年7月23日(土)～8月7日(日) 平日のみ午後1時から公開
午前9時半～午後4時半(入場無料)
記念館之階講堂(歴史文化財 旧奈良女子高等師範学校本館) 協賛・沖縄市 後援・奈良女性史研究会

沖縄の戦後のくらしを物語る生活用品や、米軍基地周辺の地域社会の変遷を記録した貴重な史料や写真を展示。さらに、朝鮮戦争期、奈良にあった帰休兵のための米軍施設「奈良RRセンター」と、それをめぐる地域社会の葛藤を物語る当時の資料も同時展示。

シンポジウム
「軍事施設と女性のくらし—沖縄と奈良を例として—」
7月29日(金) 午後1時～3時
会場：本学教養科目「ジェンダー論入門」特別講義会場
講師：伊敷勝美氏(沖縄市役所総務部総務課市史編集担当)、松村徳子氏(奈良女性史研究会会員)
司会：大塚真由美氏(奈良女性史研究会)

センター特別展

沖繩の戦後と女性のくらし —古都奈良の記憶から祈りをこめて—

期間：2011年7月23日(土)～8月7日(日)

会場：奈良女子大学記念館



会場風景

■ 展示趣旨

沖縄県第2の都市で、いまなお市の中心に広大な嘉手納基地(嘉手納飛行場)を抱える沖縄市(旧コザ市と美里村)は、戦後沖縄の縮図ともいわれる。沖縄市では市史編纂事業の一環として終戦直後から復帰に至るまでの写真や生活用品を幅広く蒐集し、それらを市内に開設した「戦後文化資料展示室ヒストリート」および「ヒストリートⅡ」において公開展示している。そこには沖縄の地域社会が基地と共存してきた歴史が刻まれている。かつて「特飲街」とよばれた、Aサインバーを中心とした米兵相手の歓楽街もその一つである。

一方、奈良は古都のイメージが強く、軍事施設とは縁が薄いように思われがちだが、60年前の朝鮮戦争時期、この地に米軍の宿泊施設「奈良RRセンター(NARA Rest And Recuperation Center)」が設けられ、セン

ター周辺には沖縄の基地周辺と同様な歓楽街が出現するなど、女性や子どもの生活に暗い影を落としていた。センター反対運動も起こるが、センターの存廃をめぐる問題は地域社会に分断と対立をもたらすことになる。しかしながら、センターが短期間で神戸に移転したこともあって、現在では奈良にこうした「過去」があったことを知る人はきわめて少ないのが実情である。アジアの軍事的緊張が懸念される今こそ、古都奈良に刻まれたこうした土地の記憶から沖縄の問題を考える必要がある。

■ 沖縄市長からのメッセージ

今回の展示会にあたって、東門美津子沖縄市長が次のようなメッセージをお寄せくださったので、以下、全文を掲載する。

展示会に寄せて

このたび、奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター主催の特別展示会「沖縄の戦後と女性のくらし」を後援する機会を賜り、あつく御礼申し上げます。

沖縄戦後、27年間におよぶ米軍統治は、米軍機騒音・墜落事故、油脂類・水銀・赤土の流出、原潜寄港による基準値を超えた放射能の検出、実弾演習による山林火災等々、県民の日常生活及び環境へ深刻な影響をもたらしました。同時に、沖縄の婦女子にとって米軍人・軍属による婦女暴行、殺人・傷害事件、強制わいせつ等、筆舌に尽くせぬほど、悲惨な体験をも強いてきました。

こうした状況にも拘わらず、県民はひたすら未来を信じ、戦後復興に、沖縄の発展に邁進し、素晴らしい歴史と文化を育んで参りました。

このような沖縄県の事情は、本土では殆ど報道されることがないと聞き及んでいます。その意味で、今回の展示会は沖縄の実情をご理解いただく上でもまさに時宜を得た、素晴らしい企画だと存じます。併せて「コザ文化」と称され、県内屈指の文化を誇るわが沖縄市の理解の一助となり、たくさんの方々わが沖縄市に足を運んでいただき、奈良県と本県との交流と友情が深まることにつながれば、これ以上の喜びはございません。

最後に今回の特別展のご盛会と、開催にご尽力いただきましたアジア・ジェンダー文化研究センターはじめ、関係者の皆様のみますますのご発展を祈念いたしまして、ご挨拶いたします。

平成23年7月23日(土)

沖縄市長 東門 美津子

■ 沖縄市の歴史と戦後文化資料展示室ヒストリート

沖縄市は沖縄本島中部の東海岸側に位置し、人口13.5万人(2011年7月現在)を擁し、那覇市に次ぐ県内第2の都市。極東最大の米軍基地である嘉手納基地(嘉手納飛行場)がある。かつては越來村と美里村に分かれていたが、戦後、米軍政府によって収容所を拠点に地域の整備が図られた結果、旧越來村地域に胡差が誕生。一方、旧美里村地域は前原市に吸収されたが、1946年、再び越來村と美里村に戻る。1950年代から本格的に米軍基地の建設が始められると、県内外から職を求めて多くの人が集まり、基地に沿って市街地が形成されていった。こうして越來村では、人口の急増とともに都市化が進行し、1956(昭和31)年に「コザ」と名称を変え、市に昇格。その後、沖縄の日本復帰後の1974(昭和49)年、コザ市と美里村の合併によって沖縄市が誕生した。

沖縄市は、市史編纂事業の一環として終戦直後から復帰に至るまでの写真や生活用品を幅広く蒐集し、これらを展示するため、2005年9月7日(南西諸島降伏調印の日すなわち沖縄戦終了の日から60周年の記念日)に、「戦後文化資料展示室ヒストリート」を、2009年9月7日に「ヒストリートⅡ」を市内中心部に開設。開設の目的は、「戦後、基地から派生する様々なエネルギーに支えられ、異文化と接触しながら、極めて個性的な文化を創出しきた沖縄市。基地の街、戦後沖縄の縮図と形容される沖縄市の責務として、あらためて戦後～復帰を見つめなおすこと」である。沖縄市の戦後史と文化を考えるのに、必見の施設である。

開室日:火曜日～日曜日 11:00～19:00

(月曜日、祝祭日、慰霊の日、年末年始は休室)

料金:無料

住所:〒904-0004 沖縄市中央1-17-17

電話:098-939-1212(内線2274)

■ 「ヒストリート」提供の主な展示物

1. 沖縄戦の終結

沖縄戦は、正式には1945年9月7日、現在の嘉手納飛行場内(コザ市の前身旧越來村字森根)で行われた南西諸島降伏調印式をもって終結した。このコーナーでは、南西諸島の降伏調印式の写真と近年、マダガスカルで発見されたこのときの英文降伏文書のコピーを展示した。

2. 戦後の沖縄における生活用品

終戦直後は物資が不足したため、葉莢を花瓶や灰皿に加工したり、アメリカ兵士の飲み物だったココアウラの空き瓶でお茶や泡盛を入れるコップ、風鈴などを制作した。また、金属類の不足から、軍用機の残骸であるジュラルミンを溶かして、鍋や釜、鉄瓶、棒ばかり、洗面器、木炭アイロン、電話などの生活用品を作りだした。これらは戦後沖縄の第一の産業と呼ばれるほど盛況を呈した。



ジュラルミン製のお釜

また、沖縄音楽に不可欠な三線も戦後の物資不足の中で入手は困難であったため、人々は創意工夫して制作した。下は胴の部分は米軍の缶詰の空き缶、弦はパラシュートのひもを使用した、「カンカラ三線」である。



カンカラ三線

下は米軍の弾薬箱を衣装ケースに転用したもの。弾薬箱は木製で丈夫なことから、重宝された。米軍放出の軍用毛布も、オーバーなどに仕立て直された。



弾薬箱の衣装ケース

3. 沖縄の米軍統治

沖縄は1945年から1972年の日本復帰まで、米軍占領下に置かれ、住民が本土や外国に出かける際には、下のような「身分証明書」と「日本旅行証明書」が必要だった。



身分証明書・日本旅行証明書

4.基地と女性

このコーナーでは、「特飲街」や「Aサインバー」に関する写真資料、米兵による暴行事件資料を展示した。

沖縄では多発する米兵の性暴力事件に対応するために、1950年、越來村(後のコザ)街外れの原野である八重島に「特飲街」と呼ばれる歓楽街が作られる。その後、コザの街には多数の「特飲街」が発生し、それは1972(昭和47)年の日本復帰まで続いた。

「特飲街」の店では米軍が定めた衛生基準をもとに、店で働く女性たちの性病検査が義務づけられ、基準・検査に合格した店には米兵立ち入り許可を意味する「Aサイン」証が交付された。こうした店は「Aサインバー」と呼ばれた。この衛生基準は、女性を守るためではなく、性病が蔓延することで軍隊の士気が落ちることを恐れた米軍による制度であった。ただ、こうした「特飲街」や「Aサインバー」の設置にもかかわらず、沖縄では米兵による性暴行事件が多発した。

■ 奈良RRセンターに関する展示

奈良についてのコーナーでは、奈良女性史研究会が発掘、整理した資料をもとに、「奈良RRセンターの概要」、「奈良RRセンター 関連年表」、「周辺歓楽街地図」をパネル展示した。さらに、同研究会が調査の過程で蒐集整理した当時の『大和タイムス』(現『奈良新聞』の前身)の奈良RRセンターをめぐる記事を奈良新聞社の同意を得て紹介した。以下は、展示の概要である。

奈良RRセンターは1952年5月1日に、4月28日のサンフランシスコ講和条約発効と同時に、日米行政協定に基づいて、奈良市内の旧横領町に開設された。

奈良RRセンターとは“The Nara Rest and Recuperation Center”の略で、朝鮮戦争戦闘前線から一時帰休する兵士の休養と元気回復のための宿泊施設として、国連軍(米軍)が設置したもので、大阪市内住友ビル4階に設置していたものが奈良へ移転。RRセンターの場所は、戦時中の興亜機械工業(軍需工場)の跡地で、薬師寺、唐招提寺の近隣であり、平城宮跡朱雀門跡に近接している。

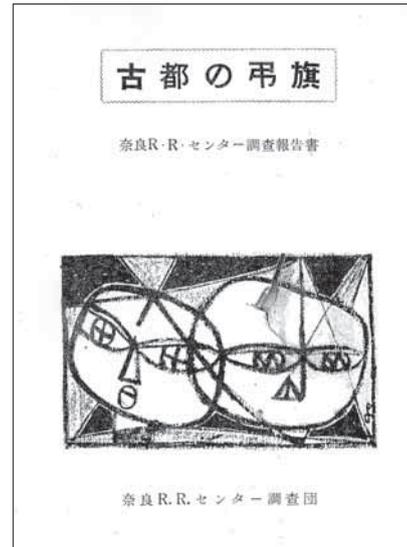
RRセンターが設置されるとその周辺には、あっという間に帰休兵士相手のカフェー、バー、キャバレー、レストラン、ギフトショップなど70余軒の店が開店し、センター街が誕生した。戦場から帰還する兵士たちは、ここで5日間の自由時間が与えられ、一人がセンター内外で20万円前後を散財し、センター街におちる金額は1ヵ月1億円とも言われた。

RRセンターの周辺には、帰休の国連軍(主に米軍)兵を相手に性的サービスを提供する女性たちが集まり、手引きをする「ポン引き」グループも全国から来県して、米軍の「性的慰安の基地」となった。

センター周辺地域では環境が悪化し、子どもたちに悪影響が出始めたことから、奈良ユネスコ協力会を中心に、県婦人協議会等の女性団体、宗教団体、労働組合、学生自治会など37団体が「RRセンター廃止期成同盟」

を結成した。奈良、京都、大阪のユネスコ学生連盟はアンケート調査をしてスウェーデン本部に訴えることを決め、奈良RRセンター調査団を結成して実態調査に取り組み、報告書『古都の弔旗』を出版した。ここには奈良女子大学生らも関わった。

その後、1953(昭和28)年7月に朝鮮戦争休戦協定が締結され、当時大津市に置かれていた米軍の西南軍司令部は8月12日に神戸移転を発表し、9月に神戸へ移転した。短期間とはいえ、古都奈良もまた、沖縄と同様の問題を経験していたといえる。



(奈良R・Rセンター調査団 編集・発行、1953年)
提供：白須洋子氏

今回の特別展示は、猛暑の時期にあたり、また会期も半月程度と短かったものの、7月27日(水)夕方のNHK奈良のニュース番組「奈良ナビ」、8月1日(月)朝のNHK関西ローカルニュースとNHKラジオニュース、8月1日(月)『奈良新聞』朝刊などで紹介されたこともあり、期間中の来場者数は約1600名にのぼった。参観者アンケートには、「軍事基地がいかにか女性や子どもの生活を脅かす存在であるかを実感した」、「奈良がかつて沖縄と同じ問題を抱えていたという事実を始めて知り、考えさせられた」という意見が多く寄せられた。

(記録：野村鮎子)

奈良女性史研究会について

奈良県が1995年に発刊した『ならの女性生活史—花ひらく』の編纂に協力したメンバーを中心に、1996年1月に発足し、県女性センターを活動拠点に活動している。「歴史に学び、未来を拓く」を主題とし、女性史の視点、ジェンダーの視点での幅広い聞き取り、「戦争と女性・人権」「DV」「女人禁制」「複合差別」問題などへの取り組みと公開講座の開催、会報「花ひらく」と「研究会誌」の発行(Vol.1～Vol.11)、他府県女性史研究会との情報交換・交流などを行っている。

軍事施設と女性のくらし — 古都奈良の記憶から祈りをこめて —

日時: 2011年7月30日(土) 場所: 奈良女子大学記念館2F講堂

特別展示「沖縄の戦後と女性のくらし—古都奈良の記憶から祈りをこめて—」の一環として、シンポジウム「軍事施設と女性のくらし—古都奈良の記憶から祈りをこめて—」を開催した。特別展示の後援団体である沖縄市から伊敷勝美氏(同市役所総務部総務課市史編集担当主幹)、協力団体の奈良女性史研究会から松村徳子氏(同研究会会員)をお招きし、講演をしていただいた。お二人の講演後、終戦後の米軍支配による権力構造を解明すべくジェンダー概念を援用して研究を進めておられる菊地夏野氏(名古屋市立大学人文社会学部准教授)よりコメントをいただいた(菊地氏の近著に『ポストコロニアリズムとジェンダー』青弓社、2010年がある)。司会は、吉田容子(本学文学部准教授で本センターのメンバー)が務めた。

■ 伊敷氏報告:「沖縄市の戦後史」



伊敷勝美氏

<基地のまち「コザ」の誕生>

1974年4月に旧コザ市と美里村の合併によって誕生した沖縄市は、終戦直後から沖縄本島中部における経済の中心として発展してきた。現在、沖縄市全体の面積の36%近くが、米軍の嘉手納基地(嘉手納飛行場)をはじめとする軍事基地・施設として利用されている。沖縄市はまさに「基地のまち」であり、戦後沖縄の縮図なのである。

くわえて、沖縄市の歴史は戦後の歴史である、と言っても過言ではない。1945(昭和20)年4月、米軍が沖縄本島の中部西海岸側から上陸し、約15万人、つまり県民の4人に1人が犠牲となった沖縄戦があった。この沖縄戦が終結したのは1945年9月7日のことで、南西諸島の降伏調印式が現在の嘉手納基地内(コザ市の前身旧越來村字森根)で行われた。これ以降、1972年5月15日の日本返還まで、米軍の統治下に置かれることになった。

1950年、米国は沖縄県内に恒久的な基地建設のための予算を投じる方針を打ち出し、この結果、当時の越來村(1956年コザ市に昇格)では極東最大といわれる嘉手納基地の整備が行われた。住むところがない、職がない、食べることさえままならない人々が、沖縄本島全域をはじめ離島や県外の奄美諸島など方々から、コザに

軍作業等の職を求めて大量に流入してきた。そのため急激に人口が増え、都市化がいきに進んだ。

<歓楽街の形成>

嘉手納基地に大量の米兵が駐留するようになると、コザの街にいくつもの歓楽街が登場した。キャバレー、カフェ、バーをはじめ、レストラン、ホテル、土産物店、洋裁店、時計店、質屋、どれも米兵相手の店が主であった。そうした店舗の経営は離島や市外の出身者で、コザ市の人口の大多数を占めた。沖縄県の場合、米兵相手の歓楽街は「特飲街」とよばれていた。当時の特飲街には、1953年の時点でいわゆる風俗営業の店が2000件余りあり、1969年には3000件まで増加した。

最初の特飲街は、旧越來村時代につくられた八重島である。米兵の性的暴行から女性や子どもを守る目的で、街の中心部から少し離れ一時期米軍の弾薬庫に利用されていた跡地に米兵相手のカフェやキャバレーができ、そこで働く女性たち(特殊婦人)が集められた。特飲街の店では米軍が定めた衛生基準の遵守が求められ、店で働く女性たちには定期的に健康診断(性病検査)が義務づけられていた。こうした基準・検査をクリアしていれば、特飲街やその地域の店舗への米兵の立入り許可される「Aサイン」証が交付された。しかし違反業者が出ると「Aサイン」は直ぐさま取り消され、性病蔓延の兆しがあった場合は、特飲街全体が米兵の立入禁止(オフ・リミッツ)となった。

コザの街にいくつかあった特飲街には、白人兵士が利用する「白人街」と黒人兵士が利用する「黒人街」とがあった。特飲街で働く女性たちの間にも、白人相手と黒人相手の女性がいたが、大抵の場合、風俗業の女性たちが最後に行き着くところが黒人街だった。米国本国の人種差別が沖縄にまで持ち込まれていた。

<コザ文化>

沖縄市は米軍基地をバックにして急激に都市化した

ため、米国の文化と戦前からの地元の人々の生活文化が混交し、それが「コザ文化」をつくり出した。食べ物、ファッション、音楽、街の景観など、個性豊かなものが生まれてきている。同市役所市史編集担当スタッフが中心となって開設した「ヒストリート」および「ヒストリートII」では、沖縄市の戦後を展示し、多くの人々に紹介している。沖縄市が経験した激動の戦後史を踏まえつつ、コザ文化を今後の沖縄市の街づくりに活かしていくことが、私たちの課題だ。

■ 松村氏報告：

「戦争と女性

—奈良RRセンターが問いかけるもの—



松村徳子氏

<奈良と戦争>

「奈良は戦争に遭わなかった」とよく言われるが、そうではない。終戦の1ヶ月前、王寺駅前が機銃掃射に見舞われ犠牲者が出たことを、奈良女性史研究会では2000年に、68歳の女性(当時12歳)から聞き取って記録した。柳本町の飛行場近くの慰安所には韓国女性たちがいたらしい、という話も聞いた。しかし奈良では、戦争の加害の歴史はもちろん、被害の歴史さえも、ほとんど語られてこなかったのだ。

<奈良RRセンターと歓楽街>

語られてこなかった奈良の歴史のひとつが、「奈良RRセンター(Nara Rest and Recuperation Center)」だ。このセンターは、朝鮮戦争前線から5日間だけ帰休する兵士の休息・元気回復を目的とした宿泊施設で、日米安全保障条約に基づく両国の行政協定によって、1952年5月1日に奈良市旧横領町に設置された。神戸市内に正式移転する翌53年9月末まで、センターの存在は奈良市の人々に多大な影響を及ぼした。

RRセンターは、宿泊設備のほか内部にレストラン、映画館、ダンスホールなどの娯楽施設を持っていた。センター自体は性的慰安施設ではなかったが、設置されるやいなや、周辺にはカフェ、キャバレー、バー、土産物店、洋品店などの店舗ができ、まるで西部劇映画に出てくるような独特の景観が出現し、夜も眠らない不夜城のようだったという。こうした歓楽街の店舗の大半は大阪の業者が経営しており、地元農家は業者に土地を貸すことで、経済的に潤った。

<女性たちをめぐって>

帰休兵を相手に仕事をしようと、歓楽街に全国から1000人とも2000人ともいわれる女性たちが集まって来た。女性たちと米兵とを仲介するポン引きも集まり、平城宮跡の南に位置したRRセンター一帯は、性売りの基地と化していった。休暇を終え再び戦地に向かう兵士たちに性病が蔓延するのを避けるため、歓楽街の業者が中心になって「奈良駐留軍サービス協会」がつくられ、米兵相手の女性を協会に登録させ、週1回の性病検診を受けさせた。性病に罹患していないことが証明されれば、バッチを与え、これを身に付けることで「安全な女性」と米兵に知らせるシステムだった。

戦場に赴く兵士たちの性欲はやむを得ないものだという前提で、一般女性の貞操を守るために兵士相手の女性を集め、「守られるべき女性」と「彼女たちを守る女性」の構図がつくられた。後者の女性たちは、戦争で働き手である親や夫を失い、自活を余儀なくされた者たちだった。当時の新聞は、彼女たちを「街笑婦」、兵士に群がる「厚化粧の女」などと書き表した。少しの境遇の違いが、女性の間大きな隔たりをつくった。

<反対運動>

RRセンター設置にともない、周辺地域では治安や環境の悪化が大きな問題となっていった。とくに地域住民を悩ませたのは、子どもへの影響だった。センターや周辺の歓楽街から近い小学校では、子どもたちの登校前に校庭内や学校周辺に落ちている使用済みコンドームを拾い集めることが教員の日課となった。また、米兵相手に売春する女性に納屋を貸し出す農家もあり、家の子どもが「パンパンごっこ」をして遊ぶなど、教育面での問題は深刻化した。そうしたなか、奈良市や県の教育、宗教、労働組合など37(最終的には45)団体が1952年9月に「RRセンター廃止期成同盟」を設立し、県や市さらには当時の外務省へも反対運動を広げていった。奈良女子大学の学生も、当時の奈良学芸大学(現・奈良教育大学)や他大学の学生とともに立ち上がり、調査団を結成してセンターの影響を詳細に調査し、『古都の弔旗』と題した報告書をまとめ上げた。

<奈良RRセンターが問いかけるもの>

奈良市内に一時期RRセンターが設置されたことは、ある意味、奈良が朝鮮戦争に加担したとも言えるのだ。センター設置によって生じたさまざまなことが、語り伝えられていない。世界の平和、社会の平和を目指してゆくためには過去の経験を語り合うこと、そして他者との差異を尊重し理解し合うこと。女性史を学んできて一番重要だとわかったことだ。過去の過ちを繰り返さないために、歴史を学んで未来を拓いていくことが、私たちに求められている。

■ 菊地氏のコメント



コメンテーター菊地夏野氏を迎えて（右から2番目）

両報告から、1950年前後のコザと奈良は同じような状況に直面していたことがわかった。1950年以降、米軍基地が固定化されていくが、まさにこの頃が、日本の歴史にとって大きな分岐点になっている。

歴史とは「彼(男)の歴史」を中心に書かれたもの(his-story)、との指摘があることはご存じかと思う。現実生きて生活している弱い人たちの存在が、抜け落ちているのだ。この点を批判して、ジェンダーの運動家や研究者が「彼女の歴史」(her-story)の重要性を押し出してきた。しかし、運動家や研究者自体、学歴が高く地位や名誉を持ち、金銭的にも裕福であることが多い。こうした女性たちは、表舞台に出て大きな声で物を言うことができる。本当に大切なのは、弱い立場の女性たちの視点だ。今回の特別展示では、「her-story」に内在する矛盾がよく表されている。つまり、米軍事基地やその関連施設ができ、その周りに歓楽街が形成されると、地域住民のなかで、家庭や子ども、「一般女性」を守るための「特殊女性」の存在を必要と考えはじめることだ。戦後の混乱期、貧困に直面した女性が最低限の生活を維持するには、「特殊女性」にならざるをえなかった。出身、貧困、障害の有無など、立場や状況が異なっても同性性を持つ者のはず。同じように性差別やジェンダー問題で苦しんだり頑張ってきた女性のはずなのに、女性の間境界線が引かれてしまうことがある。こうした線引きが行われてしまうことで、問題の根本的な解決が難しくなる。

「アジア・ジェンダー文化研究センター」には、アジアとジェンダーの二つのキーワードが入っている。これまで、大学など研究機関におけるジェンダー研究・調査では、発言力を持った女性、権力を持った女性に焦点がゆきがちだったように思う。そのような意味で、「アジア・ジェンダー」は非常に有意義な視点だ。

■ 質疑・応答(一部を掲載)

Q 八重島特飲街が街の中心部から外れた所につくられたとあったが、これで何が変わったのか。また、白人街と黒人街についてもう少し詳しく教えて欲しい。

伊敷氏:

八重島特飲街をつくったからといって、一般米兵の女

性に対する性暴力が急減したわけではなかった。1950年くらいまでは、白人と黒人の間に顕著な分断はなかったようだが、その後センター通り(現在のパークアベニュー付近)に白人兵が集まるようになると、黒人兵は照屋を中心に遊興に耽るようになった。

Q RRセンター周辺の歓楽街で性を売っていた女性や性病に罹患した女性の数を、どのように調査したか。また、センター設置にあたって行政の介入はあったか。

松村氏:

奈良女性史研究会では、過去の新聞記事を検索する作業を丹念に行った。その結果、今回報告した数値などがわかってきた。このほか、『古都の弔旗』出版に携わった人々に聞き取り調査をして、当時の状況を詳細に窺って記録した。

前面には出てこないが、駐留軍サービス協会の設立や県立病院での性病検診など、何らかのかたちで行政の後ろ盾があったことは否定できないと思う。

Q 性サービス業者が集積しているところでは現在、環境浄化が起こっているが、女性史の立場から、なぜ環境浄化が生じていると思うか。

菊地氏:

環境浄化というのは、ポリティクスの発生する、そして多くの矛盾をはらんだ言葉だと思う。不道徳なものは教育上よくないとか、一般の女性を守るとか、地域のイメージアップとか、さらには国家の体面つまり、売春を野ざらしにするのは先進国ではない、というレトリックに結びついていく。



今回のシンポジウムでは、まず報告者のお二人より、終戦直後から米軍基地を抱えてきた沖縄市と、朝鮮戦争時代に「RRセンター」が設置された奈良市のher-storyが語られ、次にコメンテータとフロアを交えた活発な議論があった。そのなかでher-storyの重要性があらためて確認されたが、それと同時に語りたくても語ることでできない個人の「生きられた経験」がまだ多くあることも、私たちは決して忘れてはならない。

いまま沖縄に、世界に、軍事基地や関連施設が置かれている現状にかんがみれば、今回のシンポジウムテーマの重みを、一層ご理解いただけるのではないかと。

(記録:吉田容子)

共催シンポジウム ジェンダーとパフォーマンス

▽講演
戸谷陽子／お茶の水女子大学 文教育学部 准教授
「パフォーマンスアートの系譜—アメリカのジェンダーパフォーマンスを中心に」
▽パネリスト 戸谷陽子、お茶の水女子大学／中川千帆、奈良女子大学／西出良郎、奈良女子大学
司会 高岡 尚子



ジェンダーと パフォーマンス

奈良女子大学文学部言語文化学科「ジェンダー—言語文化プロジェクト」第5回シンポジウム
2011年12月16日(金) 14:40 - 16:30
奈良女子大学文学部 総合研究棟(文学系N棟) N301講義室
主催：奈良女子大学文学部言語文化学科「ジェンダー—言語文化プロジェクト」
共催：奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター
お問合せ：高岡 尚子 / TEL 0742-20-3294 / E-mail naotakaoka@cc.nara-wu.ac.jp

シンポジウムチラシ

アジア・ジェンダー文化研究センターでは毎年、文学部「ジェンダー—言語文化プロジェクト」との共催シンポジウムを行っている。今年度はテーマを「ジェンダーとパフォーマンス」とした。

シンポジウムでは、お茶の水女子大学文教育学部の戸谷陽子氏に、「パフォーマンスアートの系譜—アメリカのジェンダーパフォーマンスを中心に」と題し、アメリカのパフォーマンスアートの歴史と女性パフォーマンスたちの活動について講演をしていただいた。

その後、パネリストとして西出良郎氏(本学文学部・准教授)と中川千帆氏(本学大学院人間文化研究科・准教授)を加え、ディスカッションを行った。

12月16日、文学部ジェンダー言語文化プロジェクトとの共催で、シンポジウム「ジェンダーとパフォーマンス」を開催した。



会場風景

パフォーマンスアートの系譜 —アメリカのジェンダーパフォーマンスを中心に—

● 戸谷陽子氏 (お茶の水女子大学 文教育学部・准教授)



戸谷氏の講演は、「パフォーマンス」という表現形態の解説に始まり、20世紀後半のアメリカにおける「パフォーマンスアート」の変遷を、個のアイデンティティやジェンダー、身体、フェミニズムなどの視点を交えな

がら精緻に解説したものであった。また、パフォーマンス実演の様子などがスライドで紹介されたこともあり、具体的なイメージを感じ取りつつ講演を聴くという刺激的な内容となった。

パフォーマンスは、「今・ここ」における一回限りの上演という特徴を持つ、緊張感を孕んだ表現形態である。そのため、演者にとっては自己のアイデンティティや身体をめぐる問題を追究する場となり、見る側はその一度限りの「立会人」の役割を果たすことになる。

アメリカでは1960年代に芸術運動「フルクサス」が創始され、その女性メンバーであったヨーコ・オノやシゲコ・クボタらが、自らの衣装や身体を題材にパフォーマンスを行っていた。初期フルクサスメンバーであったシュニーマンはそれをさらに発展させ、女性自らに身体性を取り戻すことを目的とした「フェミニスト・パフォーマンス」を実践する。女性身体を聖なる存在(=女神の身体)として呈示するこの方法は、男性アーティストには「あまりに小汚い」として棄却されてしまう。そこには、「女の身体は対象として見るもの」という、男性中心社会において制度化された芸術理論の存在と、それを打破しようとして批判を受ける女性という構造が透けて見える。

こうしたパフォーマンス実践と並行し、第二波フェミニズム運動も同様に、女性たちに身体性を取り戻すよう促していく。「CR」(「意識の覚醒」と呼ばれるミーティングに参加した女性たちは、男性たちの視線から解放された空間で、自分の身体を具に検討し「自分のもの」と認識することを、自立の道への第一歩と考えていた。

女であることを本質的なものと捉え、その美化を推進する流れは、80年代後半に大きな変化を迎える。演じる側が自身の美を強調するのではなく、目を背けたくなるような姿をした「バッドガール」を装うことで、女性身体に関する固定観念を打破しようとするのである。ポルノ女優でセックスワーカーのアニー・スプリングルのパフォーマンスは、とりわけ刺激的である。ポルノ女優としての自分の人生を過剰な形で語り、肉体の一部を強制的に見せることにより、見る／見られるという主客関係を転倒させ、ポルノ的身体を脱構築してしまうのである。

パフォーマンスはさらに、性的マイノリティの人々の解放を求める運動と連動し、クィア・パフォーマンスも生み出していく。特に、ゲイの男性が女性の姿を大げさな衣装や話し方で意識的に模倣してみせる「ドラッグ」の表現がパフォーマンスとして演じられることが多く、セックスが所与のものではないことを暴き出し、ジェンダー規範をかく乱する手段となっている。

一方で、1970年代に登場したローリー・アンダーソンやデイヴィッド・ボウイといったアーティストたちは、マルチメディアとテクノロジーを駆使することで、新たな形のパフォーマンスを作り出して行った。映像と電子機器、電子音楽を人間と組み合わせ、身体の延長のように駆使するこれらのパフォーマンスにおいて、人間の身体はある意味「サイボーグ化」されているとも言えるだろう。

このようにめまぐるしい変遷を遂げてきたパフォーマンスアートは、今後どこに向かうのか。そのひとつの可能性として、韓国人アーティストのニッキー・リーが紹介された。彼女はアメリカに見られる日常のあらゆる場面に「擬態」として入り込み、同化してしまう。主体としての自己存在を強烈にアピールすることから始まったパフォーマンス行為は、ここに来て、アイデンティティの揺らぎを露呈させる手段へと変化してきているようである。身体の意味が強調より希薄へとシフトしているのであれば、そのことをどう読み解くのかということが課題として提出された。



ディスカッション風景

戸谷氏の講演の後、会場からの質問も交える形でディスカッションを行った。西出良郎氏からは、西洋絵画の歴史における女性のヌードの扱い方の根底には、女性身体を支配し、男性的な欲望を充足するという一方的な視点が存在したのでは、という指摘がされた。また、中川千帆氏は、第一波フェミニズム時代に登場した霊媒たちが、誰か別の人の霊に憑かれている姿を借りることによって公開の場で話すことが出来るようになったことを紹介し、女性にとってのパフォーマンスとフェミニズムの流れには深い関係があることを指摘した。

質問は、パフォーマンスとシュールレアリズムの関係や、アジアのパフォーマーについて、など幅広いものであった。また、自己の身体が社会的に管理されていると感じるかどうか、という問いかけに応じてフロアの参加者が答える場面もあり、会場には、雰囲気は和やかながら、積極的に議論に参加しようという熱気があふれていた。(記録:高岡尚子)

共催講演会

若者に何故HIV感染が広がっているのか

性的指向と健康問題

8月21日の「性と生を考える会」主催の講演会では、宝塚大学看護学部准教授の日高庸晴氏をお招きし、性的指向と健康問題に焦点をあて、過去数回にわたり実施された調査結果をもとに、HIV感染の背景を解説していただいた。

海外で頻発するヘイトクライム(憎悪犯罪)の例や、同性間性交渉が処罰や死刑の対象となる例が紹介され、同性愛者や性的少数者への差別実態が示された一方、事件が表ざたにはならない日本で、どのような問題があるのか、具体的な数字とともに報告された。

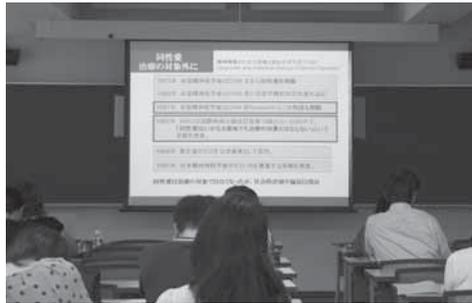
ゲイ・バイセクシュアル男性に対する調査によると、教育現場で同性愛に関する情報を「一切習っていない76.5%、異常なもの4.5%、否定的情報9.9%」と、現在の教育環境が圧倒的情報不足で不適切な環境にあることがわかる。また、「これまでに自殺を考えたことがある65.9%、自殺未遂14.0%」とあるように、当事者がメンタルヘルスを悪化させている状況や、異性愛者を装うことによる心理的葛藤が抑うつや特性不安・孤独感を強め、自尊感情を低くしている現状が示された。あわせて孤独や不安な心理が、コンドーム常用率を低くしているであろうことも報告された。

「思春期におけるライフイベント平均年齢」では、ゲイであることをなんとなく自覚したのが平均13.1歳、16.4歳で初めて自殺を考え、17.7歳で自殺未遂を経験し、ゲイ男性に初めて出会うのは20歳、男性と初めてセックスするのも20歳、ゲイの友だちができるのは21.6歳であることが紹介された。学齢期にある当事者が、自分の性的指向に気づいた時点ですでに自己否定から出発せざるを得ない厳しい状況がわかる。

注目すべきは、「避難場所としての保健室」であろうか。仲間はずれにされていると感じたり、「ホモ・おかま」という言葉による暴力被害、また言葉以外のいじめ被害などを経験している生徒は、用事がなくても保健室に行く率が高い。現場でアンテナを張っておいでいただきたい事象である。

後半には「認知行動理論による科学的HIV予防介入プログラム」が紹介され、「(知識があるのに) どうして予防行動ができないのか(コンドームを使えないのか)

=使わない理由」ということに注目した取組が報告された。自分の思考や行動のパターンを知り、コンドームを使わないことを選択する理由を減らしていく作業とともに、具体的な手段(使いたいと思っているけど上手く使えない人のためのコミュニケーション例)も提案するというプログラムは、ネットを駆使できる若い世代には、より親しみやすく、使いやすい(=効果が期待できる)のではないだろうか。実際に、プログラムの参加者は、コンドーム使用率が上がったと



いう成果も併せて報告された。

参加者のアンケートには「わかりやすく説得力がある話だった」という声が多く、「自尊感情の大切さを改めて感じた」「教育課題を認識した」「教職員の研修が必要」という感想があった。また、プログラムについては「女性や多様な対象に応用できる」「自己決定の場で自分との対話がよりよく生きる方向に展開していけば差別偏見の問題に関しても取組の糸口になると思う。注目したい切口」などの声が寄せられた。

講演を通して、HIVはあくまでもひとつの切り口であって、それが問題のすべてではないということが示された。象徴的に見える数字やたまたま表面化した一事象(いじめや自殺未遂など)から何を讀みとるのか、その背景や原因を深く掘り下げる視点と具体的なアプローチが必要だということである。教育機関や社会の一員として、「同性を好きな人もいること」「多様な性を生きる人がいること」「異性愛者であることや男か女のどちらかであることを当然とする学校・社会の中で性的少数者がおかれている状況」について、認識しておくべき事実である。

また、日高氏は、同性愛のことを「あまり扱いたくない」と感じるとしたら、どうして扱いたくないとを感じるのか、扱いたくない自分自身について考えてみることを、まずは向き合うことから始めることが大切であると提案された。本当は見えないだけで存在しているはずの当事者にとって、否定的な情報や刷り込みが軽減されるような環境が望まれる。

(参照: <http://www.gay-report.jp/>)

(記録: 中田ひとみ)

奈良女子大学 女性教員数



2012

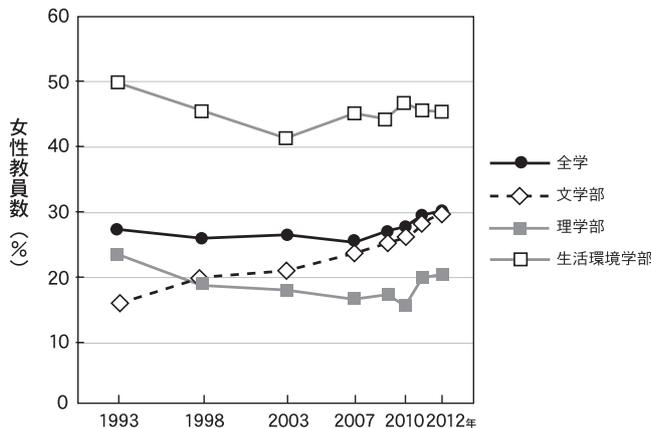
安田恵子

文部科学省が3年ごとに実施している学校教員統計調査によると、2010年度の我が国の大学本務教員数は174,934人で、そのうち女性教員は35122人、20.1%であるという。2007年度の調査から1.9ポイント上昇しており、過去最高になった。女性教員数の増加に向けて様々なポジティブアクションが導入され、その成果が現れてきたといえる。奈良女子大学でも「女性研究者支援モデル育成」や、「女性研究者養成システム加速」などを通じて努力が重ねられており、徐々に女性教員比率の上昇がみられている。アジア・ジェンダー文化学研究センターでは、これまで本学における女性教員数について調査してきた。今回は2012年1月末現在の女性教員数について報告する(図1・表1)。

2012年1月末現在の本学の教員数は194名、女性教員数は58名29.9%で緩やかな上昇傾向を示している。文学部では1993年には15.8%であった女性教員比率が1998年には19.7%、2007年には23.3%、その後も年々上昇し、2012年には29.7%に達した。理学部では1993年には23.2%あった女性教員比率が徐々に減少を続け、2010年には15.4%と低迷したが、2011年に上昇に転じ、2012年には20.7%になった。生活環境学部では1993年には49.9%あった女性教員比率は一旦減少し、2003年には41.5%になったが、その後は上昇して2007年からは一貫して約45%の高い比率を示している。

職階別の女性教員数および比率は、教授は18名(20.2%)、准教授18名(23.1%)、講師4名(80.0%)、助教18名(81.8%)であった。2011年よりもやや教授の女性比率は高くなっているが、職階が下がるにつれて大きく比率が上がる傾向は改善していない。

図1 奈良女子大学における女性教員比率の推移



他大学における近年の女性教員比率をみると、東京大学では10.3%、京都大学8.1%、大阪大学11.3%、神戸大学13.0%、大阪府立大学18.5%であり、各大学ともやや上昇傾向にあるものの、大きな成果はあがっていないのが現状である。一方、女子大学ではお茶ノ水大学48.1%、津田塾大学50.0%、東京女子大学40.0%といずれも高い女性教員比率を達成していて、本学の女性教員比率はそれに及ばない。

女性教員数を増加させることは、性によらない雇用の平等化や多様な人材の登用という意味だけでなく、一定数の女性研究者が存在することにより、研究者を目指す女性学生にロールモデルを提供できる点でも重要である。もともと大学における女性研究者の数は少なく、急激な女性教員比率の上昇を目指すには無理がある。研究者を目指す女性の育成や、女性の働きやすい環境づくりなど、時間のかかる地道な取り組みが必要である。

奈良女子大学は第二期中期目標・中期計画において全学の女性教員比率を30%以上にするという数値目標を挙げている。30%という数字は一応達成できたと考えられるが、高度な専門知識を持つ女性研究者の社会への輩出を伝統的に使命としてきた本学としては、これで満足すべきでなく、なお一層の取り組みが期待される。

表1 奈良女子大学における女性教員数・男性教員数
2012.1.31現在

文学部		
学 科	女性教員数	男性教員数
人文社会学科	4 (16.7%)	20 (83.3%)
言語社会学科	9 (40.9%)	13 (59.1%)
人間科学科	6 (33.3%)	12 (66.7%)
	19 (29.7%)	45 (70.3%)

理学部		
学 科	女性教員数	男性教員数
数 学 科	3 (25.0%)	9 (75.0%)
物 理 学 科	3 (15.8%)	16 (84.2%)
化 学 科	3 (16.7%)	15 (83.3%)
生 物 学 科	4 (22.2%)	14 (77.8%)
情 報 学 科	4 (26.7%)	11 (73.3%)
	17 (20.7%)	65 (79.3%)

生活環境学部		
学 科	女性教員数	男性教員数
食物栄養学科	6 (50.0%)	6 (50.0%)
生活健康・衣環境学科	5 (35.7%)	9 (64.3%)
住 環 境 学 科	6 (50.0%)	6 (50.0%)
生活文化学科	5 (50.0%)	5 (50.0%)
	22 (45.8%)	26 (54.2%)

全学教員数 194
女性教員数 58 (29.9%)
男性教員数 136 (70.1%)

※教員は学部にも所属する教授、准教授、講師、助教とした。

帰国留学生のキャリア形成と ライフコースに関する調査Ⅲ

報告

「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査Ⅲ」は、平成21年度から5ヵ年計画でスタートした本センターの重点プロジェクトであり、女性のキャリア形成の視点から、本学に留学した学生たちが帰国後にどのような職につき、どのようにキャリアを形成し、どのような人生を歩んだのかについての調査を行うものである。

本学には戦前の奈良女子高等師範学校（以下、「奈良女高師」）時代から留学生教育に携わってきた歴史がある。そのためこのプロジェクト調査も奈良女高師の留学生に重点を置いている。本研究の基盤となる先行研究（近代日本における女子留学生や奈良女高師の留学生受け入れ概況）については、すでにニュースレター9号（16ページ）で紹介しているので参照されたい。

本研究は、「校史資料（留学生関連資料）調査」、「帰国留学生へのヒヤリング調査」、およびセンター一員の研修と調査報告を兼ねた「公開研究会」の3部門から構成される。今年度は「校史資料調査」、「帰国留学生へのヒヤリング調査」を重点的に行った。これを以下に紹介する。

校史資料調査

| プ | ロ | ジ | エ | ク | ト | 研 | 究 |

当センターでは昨年度より奈良女子大学所蔵の女高師時代の校史資料について調査を行い、留学生についての資料を蒐集・整理している。調査にあたったのは、杉本史子（立命館大学非常勤講師）・磯部香（本学博士研究員）・羽田朝子（センター助教）の3名である。本号では23年度の成果を三つのテーマに分けて報告する。

1 最初の本科留学生・王秀英女史 朝鮮人留学生とナショナリズム

奈良女高師で毎月開かれていた評議会の議事録からは、留学生たちの学内外における動向や、学校側から見た教学上の問題が窺える。この議事録から、最初の本科留学生・王秀英女史と、朝鮮人留学生とナショナリズムに焦点を当てて紹介する。

王秀英女史は1924年4月に聴講生として奈良女高師に入学し、成績良好につき、翌年には本科に編入を許可された。王女史は日本語に堪能であったため、しばしば留学生を代表して、学校側に対し要望を伝えるという、橋渡しの役目を果たしていた。例えば、留学生のみに厳しい郵便物の取扱いを日本人学生と同等にほしいという要望や、支那という言葉の使用を避けてほしいという要望も、王女史の名で出されている。

1927年、王女史が3年生の時、日本陸軍が山東に派

兵されるというニュースが伝わった。当時、奈良女高師で学んでいた17名の中国人留学生は、直ちに他校の留学生たちと連絡を取り合い、山東出兵反対の宣言文を出すことに決めた。だがこの試みは奈良県警の知るところとなり捜査を受けることになる。この事件の推移については、中塚明「奈良女子高等師範学校の中国人・朝鮮人留学生」（『アジア女性交流史研究』9号1971）に詳しい。評議会記録からはさらに、事後処理における王女史の活躍ぶりが伝わってくる。警察の捜査が入り狼狽している教員たちを前に、彼女は留学生たちの意見を通訳して伝えるという役割を担う。留学生の中には、日本のやり方に断固反対すべきだという「強硬な意見」もあったが、反対に「学生ハ総ラク勉学スヘシ。政治運動ナドハツマラナイ」という意見もあり、一枚岩ではなかったようだ。王女史は硬軟両派にわたる留学生たちの意見をまとめ上げ、「日本ノ出兵ニハ反対デアルケレドモ赤化ト云フコトハ全ク考ヘテ居ナイ」と、学校側を刺激せぬよう言葉を選びながら弁明に努めている。幸い、

この事件で処分された留学生はいない。1920年代の後半、日中関係は大きな転機を迎えようとしていた。

そのような中でも、王女史の学校生活は充実していたようだ。初の本科留学生であったため、彼女の経験はその後の留学生制度の基礎となった。4年時には外国人として初めて教育実習にも参加した。彼女が日本の学校の教壇に立つに当たって、特別の配慮をすべきだという議論がなされている。1929年の春、晴れて卒業の日を迎えた王女史は、答辞を読んだ。留学生が卒業生代表として答辞を読むのは異例のことで、議事録には「今回ハ最初ノ卒業者トシテ特ニ答辞ヲ述ヘルノデ次回カラ之ヲ例トスルノデハナイ」と強調されている。卒業後、王女史は奈良女高師の研究生となり、勉学を続けた。その後も中国人留学生たちの世話係を任されるなど、学校側からは何かと頼りにされていたようだ。王女史は後に広島文理科大学(現・広島大学)に進学している。

次に朝鮮人留学生について述べたい。奈良女高師の朝鮮人留学生を語る上で欠かせないのが、柳原吉兵衛という堺の篤志家である。柳原氏については朴宣美『朝鮮女性の知の回遊—植民地文化支配と日本留学—』(山川出版社、2005年)に詳しいが、議事録からも、留学生の斡旋、学資の援助、病気見舞い、果ては留学生の「思想善導」にまで、深く柳原氏の存在が関わっていたことが見て取れる。

だが朝鮮人留学生は中国人留学生とは異なり、母国が植民統治の下に置かれるという複雑な立場にあった。彼女たちに関する記録では、思想やナショナリズムに関わることも少なくない。

教学面では1920年代後半より、「裁縫ノ時間ニ日本服ノ代リニ朝鮮服ノ研究ヲ」したいという要望が繰り返し出されている。留学生が将来使うことのない和裁技術の習得に異を唱えたのも、無理からぬことである。だが家事科の教員免許状には、和裁の履修が義務付けられていたため、留学生たちは教員免許か民族服かの選択を迫られることになった。

警察が関わった事件もあった。1928年には、京都で開かれた「朝鮮女子ノ団体デアル権友会支會」に留学生が参加したことで、奈良県警から注意を受けている。権友会は「民族開放ナドヲ綱領ニ加へ」ていることから、「左傾的」だと思われたようだ。同年にはまた、留学生が「青年同盟会」の奈良支部に関係したとして、取調べを受けた。1930年に、朝鮮人留学生の一人が日本人学生とともに、マルクスの読書会に出席しようとしたときには、京都府警特高課に身柄を拘束されている。その後も思想面で注意を受けたり、処分されたりする学生が後を絶たなかった。1932年の教官会議記録には、「半島出身留学生中ニ民族自決運動ヲナスモノアル由ナルヲ以テ

注意ヲ要ス。鮮語ノミノ会合ハ禁止スルヤウニシタシ」と記されている。朝鮮人留学生は自国の言葉を使って話し合うだけで警戒されるという、厳しい立場に置かれていたことがわかる。

奈良女高師を卒業した留学生の多くは、帰国後、教育や科学の分野で活躍した。だがさまざまな理由から、処分を受けて、退学を余儀なくされた学生もいる。特に思想的な締め付けが厳しくなっていった時期には、日本の社会や学校教育に疑問を抱き、それを行動に移した留学生もいたはずである。留学生の中にいったいどのような動きがあったのか、残されたわずかな記録の中から、すくい上げていくことも重要であろう。

(杉本史子)



2 | 満洲国と奈良女高師

ここでは、奈良女高師と満洲国大使館や日満帝国婦人会との間で交わされた文書を中心に紹介する。

奈良女高師と駐日満洲国大使館との間で交わされた公文書の大部分は、奈良女高師に在学している満洲国女子留学生の実態把握と管理に関するものである。奈良女高師は毎回大使館の依頼で「留日学生現況調査」を提出しており、時には身元調査も行われ、留学生の人物評価や成績、家族状況、健康診断の結果についても大使館に報告していた。留学生たちは「留学生必携」に則り、模範的な留学生であることを常に求められた。学校側は留学生の学生証発行、転科や退学に至るまで満洲国大使館の了承を得なければならなかったことなどから、満洲国と奈良女高師の非対等な関係性を伺い知ることができる。また、卒業後の就職や進路に関しても、本人が自由に選択できるわけではなく、日本留学生の大半が国家機関で働くことを求められており、国家主導のもとで就職も厳密に統制されていた。一般に、満洲からの留学生は満洲国の大変厳しい管理下に置かれていたが、無論、奈良女高師に進学した女子留学生も同様であった。

ただ、今回の満洲国関連の校史資料調査の過程で、女子留学生に特化した資料を以下の2点発見することができた。

まず、一点目は1939年1月28日以降の日満帝国婦人会という婦人団体と奈良女高師との数回にわたる往復文書である。日満帝国婦人会が満洲国からの女子留学生を13名預かっており、留学生の代わりに奈良女高師に対して、入学手続きや大学での待遇などを問い

合わせる書簡があり、それに対し奈良女高師は「留学生は本邦人と同等に取扱候」と回答している。その直後の1939年2月16日に満洲国大使館から送られた公文書を見ると、9名が奈良女高師への入学を熱望しており、入学のための配慮を願っている。この年、奈良女高師は特設予科に8名の満洲国留学生を受け入れている。以上より推察するに、女子留学生の行き来によって奈良女高師と日満帝国婦人会の間にはネットワークが構築されており、このネットワークによって奈良女高師と満洲国との関係性が強まってくると考えられる。

二点目は、1941年6月中旬頃の満洲国大使館からの電報である。夏休みの9日間、軽井沢で女子夏季修練を実施する予定で、満洲国女子留学生を募っているという内容である。この女子夏季修練の目的は「女子留日学生トシテ将来満洲国中堅構成分子トシテノ資質向上ヲ為夏期休暇ヲ利用シ指導者以下起居ヲ同ウシテ家庭的訓練ヲ施スト共ニ女子ニ必要ナル教養ヲ与フル」ことである。近代国家の特徴のひとつである、性別役割分業規範を女子留学生に修養させようという満洲国の意図が伺える。さらにこの試みによって、全国に散らばっていた、指導者と留学生、さらには女子留学生同士の連帯を促そうとしていたと考えられる。

以上の資料から分かるように、彼女らは奈良女高師を卒業した後、満洲国民を教導する側に立つことを満洲国から強く求められている。それを第一義の目的としているからこそ、奈良女高師に官費留学できていると推測できるのだが、しかし一概に彼女らを満洲国において統治側の人間とみなすことは大変困難を伴う。満洲国と大日本帝国との緊密かつ緊張関係の中で、満洲国民のどの民族が、またはどの性が統治者側のスタンスであり、どの人々が被統治者側に位置しているのかという明確な二項対立的構図を描くことは容易でないからだ。そのような複雑に絡み合った図式の中で、校史資料はひとつの方向性を指し示しているように思う。校史資料を通して、奈良女高師を紐帯とした、民族を超えた女性たちのつながり＝ネットワーク構築の一端を伺い知ることができるからだ。日満帝国婦人会や女子夏季修練の活動は、民族や立場こそ違え、同じ性を持つ女性たちだからこそ、つながることができるという「神話」によって成立しており、その女性たちをつなぐための情報や活動の場を奈良女高師が提供しているのである。女性たちのネットワークを精緻に紐解くことで、その関係性の中に潜む帝国主義を炙り出すことができるのではないかと考える。

今後の課題として、満洲国において奈良女高師出身の留学生たちが現地の学校教育の中で、どのような役割を担っていったのかを解明することで、ジェンダー

化された満洲国統治メカニズムが明らかになるのではないかと考えている。

(磯部香)



3 | 満洲国女性作家・但娣^{タンテイ}

今年度の調査によって、奈良女高師が数多く受け入れてきた満洲国官費留学生の中に、当時「但娣」という筆名で活躍した女性作家がいたことが判明した。ここでは但娣——本名・田琳(1916～1992)女史の紹介をしたい。

但娣の父親は中国東北部のチチハルで中学校教師をしていたため、彼女もかの地で幼少期を過ごした。1931年に満洲国が成立したのは、但娣が黒龍江省立女子師範学校に在学中の17歳のことであった。女子師範を卒業後、さらなる知を求めた但娣は満洲国の官費留学生の試験を受けて合格し、1937年の22歳の時に奈良女高師の文科(歴史地理専攻)に留学した。この留学時期に、但娣は本格的な創作活動を始め、大阪毎日新聞社出版の『華文大阪毎日』に多くの作品を発表した。なかでも彼女の代表作「安荻と馬華」(1940.1)は日本軍の侵攻によって悲劇の運命をたどる中国人男女の姿が描かれており、『華文大阪毎日』の百枚中編小説募集で入選をはたしている。これにより、但娣は満洲国女性作家として広く知られることになった。

但娣は1942年に27歳で奈良女高師を卒業し満洲国に帰国すると、教員として働きながら文筆を続けた。翌年12月には、単行本『安荻と馬華』(開明図書公司)を出版している。この単行本には合計29篇の作品が収められており、その大部分が奈良女高師での留学期に創作したものであった。しかし、その後の但娣は苦難の人生を歩むことになる。60年代に文化大革命が勃発すると、「日本のスパイ」という容疑で逮捕され、出獄後1979年に名誉回復されるまで、実に12年あまりのあいだ創作の自由が奪われたのだ。その後80年代になって満洲国の文学が再評価されはじめると、但娣への関心も高まり、数々の伝記や専論が登場した。それらは但娣の作品を、抗日文学として高く評価している。

但娣に関するこれまでの研究では、日本留学の生活について不明な点が多かったが、奈良女子大学所蔵の校史史料から以下のことが明らかになった。

但娣は1937年に奈良女高師の特設予科で一年過ごし、その後本科に入った。本科1年のときに顔面神経痛のため半年間休学し、翌年留年した。その後2年生から



但娣。奈良女高師付近の下宿にて（『安荻と馬華』1943年に所収）

4年生まで順調に進み、1942年に卒業した。在学中の6年間は一貫して満洲国政府から毎月30～45円の奨学金を受け取っていた。当時、そばが一杯15銭、巡査の初任給が45円、小学校教員の初任給が50～60円ほどの時代である。また奈良女高師は全寮制であったが、40年代以降に留学生数が増えたため学校の付近に下宿を借りることが許されるようになっていた。但娣も1940年から卒業するまで近くの下宿で過ごしている。

但娣は奈良女高師で開催された修学旅行にも参加している。1941年11月には愛知・滋賀へ4日間、同じ専攻の日本人の同級生とともに修学旅行に行き、かの地の史跡を見学した。また卒業の半年前の1942年3月には、4名の満洲国留学生とともに一週間の卒業旅行に行っている。当時、満洲国留学生は日本政府から卒業旅行のための補助が支給されており、奈良女高師は毎年この補助金で満洲国留学生のための旅行を開催していた。この旅行で但娣は九州へ行っており、太宰府天満宮、熊本城、桜島といった代表的な観光地を巡っている。このときの費用は一人当たり51円79銭で、このうち50円が日本政府からの支給であった。

このことから、但娣の留学は経済的には奨学金に支えられ、規律に縛られた寄宿舎ではなく、ある程度自由のきく下宿生活を送っていたことが分かる。また修学旅行に参加して、留学生が個人では行けないような場所を訪れ、見聞を深める機会もあったのだ。

また但娣の単行本『安荻と馬華』に収められている留学期の日記「角涯」からは、彼女が充実した生活を送っていたことが窺える。例えば奈良女高師の特別研究の

授業で女性史をテーマに同級生たちと討論したこと、図書館や本屋に立ち寄っては本を読み、数多くの西洋文学を読んだことが記されている。また学校での勉強の傍ら、喫茶店でコーヒーを飲んだり、映画館でフランス映画を鑑賞したり、あやめ池遊園地に遊びに行くなど余暇を楽しむ姿が窺える。そして友人たちと若草山や奈良公園へ行って自然を愛でることもあった。ある日の日記には次のようにある。「奈良公園の緑の草に寝そべて、私たち三人の女の子は夢をみることもなく草原の中で眠った。鹿が鼻で私たちの顔をつついた。まったくもう！」

歴史的な観点から見れば、満洲国の日本留学政策は、国家建設の礎となる人材を合理的に育成する装置であり、日本の植民地政策の一環であった。但娣も留学中、敵国で学ぶ現実に苦悩したことであろう。だからこそ但娣は日本の占領下にある満洲国の人々の苦しみを作品に描いていったのだ。その一方で、留学生活が但娣に創作に必要な自由で充実した時間を与えたことも否定できない。

但娣は文壇に復帰した1980年に散文「奈良を憶う」(『江城文芸』)を発表し、奈良での生活を回顧している。この作品からは確かに彼女が留学の地である奈良に対し深い懐かしさと親しみを抱いていたことが読み取れるのだ。

(羽田朝子)



知を求めて世界に羽ばたいた留学生——王興栄女史

2011年9月、王興栄女史（1926年生まれ）へのヒアリング調査のため、センター委員の大平幸代・中川千帆はカナダのブリティッシュコロンビア州リッチモンドにある王女史の自宅を訪問した。王女史は1944年に奈良女子高等師範学校の特設予科を卒業して本科の理科に入学するも、第二次世界大戦の混乱のためほとんど授業を受けられずに帰国した。しかしその後、南京、台湾、そしてアメリカのテキサス、香港、そしてカナダへと移動を繰り返し、近代の歴史のさまざまな分岐点を経験した重要な歴史の生き証人である。インタビューでは、王女史はこれまで誰にも話すことがなかったと言う貴重な話を中国語と英語を自在に操りながら、快く語ってくれた。

■ 生い立ち——奈良女高師での学び

王女史は黒竜江のチチハル出身。中学校の校長の父親と専業主婦の母親の間に、9人兄弟の5番目（兄が3人、姉1人、弟3人と妹1人）の子として生まれた。長兄、姉、3番目の兄も日本に留学している（姉の王学栄女史は1942年から奈良女高師の文科で学ぶ）。満洲国の女学校の1期生であった彼女は、裁縫、料理、国民道徳、歴史地理、勤労奉仕、日本語を毎日一時間学んだが、彼女の好きな数学の授業はなく、兄にもらった日本の参考書で勉強した。優秀だった彼女は女学校の校長の推薦を受け、新京（現・長春）の留日予備校に入って一年間勉強した。王女史はそこで日本の歴史・地理、日本語のほか、数学、科学を学んだ。留学先に奈良女高師を選んだのは、官費がもらえることや、当時東北では奈良女高師が有名で、黒竜江の人は多くが奈良で学んだからだそうだ。実は王女史の留学前に、父親が学生を国外へ逃亡させたという罪で日本軍に逮捕され強制労働をさせられたが、知を求める王女史は日本留学の意思を変えなかった。1943年1月に東京に着き、3か月間婦女会館に滞在した後、奈良女高師の特設予科に入学した。

王女史に支給された官費は、記憶によれば55満洲円で、それで十分事足りたという。黒いスカートに白いブラウスの制服があったため、服を買う必要もなかった。髪型はチューブ状のものにネットで髪を巻いてフックでまとめる「女高師巻き」という髪型に決まっていた。授業では、お作法の時間が特に印象深かったそうだ。お作法室でおばあさんの先生が「しとやか、親切に……」という長い文章を暗唱させたという。しかしそのほかには予備校で習った内容ばかりだったため、特設予科の授業で特に得るものはなかったと言う。

王女史が奈良女高師の理科で授業を受けられたのは、1年生の1学期までだった。本科の授業は短かったけれど面白かったと王女史は振り返る。宿舎は、一舎につき畳の部屋が3つがあり、各部屋に4人の学生がいて、2週

間に1回炊事当番が回ってきたという。当時は配給で食料は少なく、卵はあったが肉を食べた記憶がないそうだ。姉の王学栄女史は1944年に結婚のため帰国したが、勉強したかった王女史は寂しくなかったという。



1946年、友人の劉士儀（左）と。（王興栄女史提供）

終戦間際になり、日本の学生が学徒勤労令・女子挺身勤労令によって工場に行ってしまうと、残った学生たちの食糧事情は悪化した。彼女たちは配給と農村で調達する食料でしのいだと言う。友人の学生が家から持ってきた砂糖と石鹼を持って農村に行き、サツマイモや桃、大根に交換して食べたそうだ。当時、寮に残ったのは、満洲国や中国の日本占領地から来た留学生だけだった。授業もなくなったため、寮の舎監の指導のもと、日本の兵士が東南アジアで使用する蚊帳を繕ったり、金属を拾ったりした。王女史は押入れのふすまの引手の丸い部分はずして差し出そうとし、舎監に叱られた思い出を懐かしそうに語った。

■ 帰国、南京へ

勉学という本来の目的が達せられないため、王女史は帰国を試みるが、そう簡単にはいかなかった。まず生徒主事に帰国したいとの旨を報告したところ、警察に通報され県境を越えたという理由で捕まった。その後、45年の夏に軍需工場が大陸に疎開するための船に新潟から同乗した。日本海を8日間航海したが、満洲や朝鮮の港湾は魚雷で囲まれて進めず、やっと陸地に着い

たかと思うとそこは敦賀だった。ちょうど船上にいた時に玉音放送があったが、終戦を知ったのは敦賀到着後だという。敦賀から京都に行き、吉田山にある卿雲寮(満洲国留学生宿舎)に住むことになった。京都では、積極的に京都帝国大学教授のドイツ人夫人やカトリック教会のスペイン人宣教師から英語を学んだ。間もなく上海の姉からの手紙が王女史の元に届けられた。日中間の通信は途絶えており、中国からの便りは2年半ぶりだった。そこで東京の中華民国駐日代表団文化組へ行き、上海に行くB24に乗ってやっと帰国が叶った。しかし上海に着くと、姉は南京に引っ越した後だったため、さらに南京に移動することになった。

■ 台湾から香港へ

南京では王女史は1947年1月に金陵大学に入学したが、まもなく共産党が南京に進出したため、姉家族や父とともに台湾へ逃げることになった。実際、金陵大学にいたのは1948年11月までだったが、「2年級在学」の証明書を発行してもらい、翌年1月に台湾大学の数学科に転学し、1951年の6月に卒業した。卒業後に王女史は台中女子中学で1年間教え、その後台南工学院で助教を5年間務めている。

台南工学院で働く間に、王女史はまた新しい勉学の機会に出会う。台湾では反共政策の一環としてアメリカ合衆国の奨学金が数多く提供されており、そのチャンスを掴んでテキサス・テック大学への留学を決めたのだった。テキサスでTAをしながら学ブスカラシッブを得た王女史は、生活の安定と数学を学ぶ機会を得たことに幸福を感じたと言う。その後修士号を得た彼女は、香港の中文大学での教職の機会を知り、1964年に香港へ赴任した。

中文大学は政府の大学であるため、香港の居留証IDやパスポートをもらえる特典があり、家族のいる台湾や中国本土に行くために好都合であった。だが香港でも彼女はマイノリティであった。当時、周囲の香港人の大多数はイギリス留学帰りで、広東語とイギリス英語を話していた。王女史はアメリカ英語だったので、コミュニケーションが難しく苦労したという。

香港は政治的に複雑な場所で、親共、反共、親国民党の学生たちがおり、また買収も盛んであった。王女史は台湾大学卒業であるため国民党派だと思われたり、アメリカ留学経験から親米派だと思われたりもした。また王女史が香港に赴任した1964年には、中国が原子爆弾を保有して国力を証明しており、台湾大学の卒業生の多くが中国派へと転換していた。そのため王女史が香港に就職したのも大陸に帰るためではないかと疑われたが、勉強に集中していた王女史は政治には全く関

心がなかった。この姿勢はその後も変わらず、香港時代に様々な政治団体が王女史を取り込もうと誘いをかけたが、どんな誘いもはねのけたという。

■ 家族との再会

王女史が戦後離れ離れになっていた家族に再会したのは、文化大革命が終わってまもなくの頃だ。文革中、大陸に残った家族は、父が台湾にいることで批判され、特に兄は過酷な労働改造に課せられた。79年に故郷チチハルを訪ねた時、母親は36年間ずっと音信不通だった王女史がすでに死んだものと思っていたという。王女史は翌年にも帰国し、母親に白黒テレビを買ってあげるなどしたが、母親はそれから間もなく81年に亡くなった。母親のほか大陸にいる兄や弟にも再会できた。



1979年、チチハルにて、母(左)との再会。(王興栄女史提供)

■ 博士号取得とカナダ移住

香港中文大学を定年退職した王女史は博士号の取得を決意した。1986年の60歳のとき、再びアメリカのテキサス・テック大学に戻り、博士論文にとりかかった。30年近いギャップがあったため、専門分野を学び直す必要もあったが、89年に博士号を取得した。

博士号取得後、王女史はカナダ政府が退職老人の移住を受け入れていることから、カナダへの移住を決心する。ヴァンクーバー近郊のリッチモンドに移住先を決めたのは、姉の住むアメリカのカリフォルニア州サンフランシスコに比較的近いこともあるという。姉は戦後に台湾の女子中学で国語と地理を教えていたが、子供たちがみなアメリカに移住したので、退職すると孫の面倒をみるためにアメリカに渡ったという。

王女史は一度も結婚することなく、現在も一人暮らしをしているが、友人も多く淋しそうな様子はない。友人たちが結婚によって様々な苦悩を経験するのを見てきた彼女にとって、結婚とは自由を妨げるものであるという。彼女は数学への情熱に駆られるままに、日本、南京、台湾、アメリカ、香港と様々な地で学んできた。複雑な政治情勢のなかで困難を経験しながらも、家族への援助や補助を続けながら、自分の情熱に忠実に人生を歩んできた。20世紀の政治的葛藤の歴史を背景とする彼女の情熱、そして政治的・物理的困難に屈服しない姿は、実に印象的であった。(中川千帆)

女性政治家として活躍した台湾留学生——許春菊女史

許春菊女史(1938年 家事科卒業生)は、戦後の台湾で政治家として活躍した女性である。残念ながら1997年に亡くなっており、本人へのヒアリング調査は叶わなかったが、当センターの野村鮎子(センター長)・羽田朝子(センター助教)は台湾の台南に住む娘の梁望恵女史を訪問し、許女史の生前について話を伺うことができた。また台湾中央研究院近代史研究所は1992年に許女史にヒアリング調査を行っており、その記録が同研究所出版の『口述歴史』第5期(1994)に収められている。これらの資料をもとに許女史の足跡を紹介したい。

■ 生い立ち——奈良女高師での学び

許女史は1918年に日本統治下の台湾・澎湖に生まれた。父親は建設業を営んでいたが、許女史のほか10人の兄弟姉妹がいたため、生活は決して裕福ではなかった。しかし父は教育を重視し、当時まれなことに女の子でもみな高等女学校まで進学させた。許女史も公学校を卒業後、1930年に台南第二高等女学校に入学している。台南第二高女では教師の大半が日本人で、日本語で授業が行われた。許女史は日本語がうまく成績優秀だったため、卒業間近になると奈良女高師の卒業生である台湾人教師の莊無嫌先生(1932年 家事科卒業)から彼女の母校を受験するよう勧められた。当時、奈良女高師は大変な難関校で、同年に台南第二高女から3名が出願したが、そのうち許女史だけが合格した。

奈良女高師で許女史は家事科を専攻するが、家事、裁縫、園芸のほか教育心理学や生物、化学、建築学などの科目も履修した。奈良女高師では卒業後に二年間の教員勤務が義務付けられているかわりに学費を納める必要はなかった。しかし雑費や生活費は自己負担であったため、故郷で教師をしていた姉が仕送りをしてくれたという。また全寮制であったため許女史も日本人と同じように寄宿舎に住み、12人のルームメイトとともに炊事や清掃、洗濯を分担し共同生活を送った。当時留学生は少なく、同じ学年に彼女のほか朝鮮人2名と中国人1名がいるだけだった。当時あって台湾人は日本人として扱われたため、許女史は在学中に日本人生徒と差を感じることはなかったという。

■ 卒業後、結婚。妻として満洲へ

奈良女高師を優秀な成績で卒業した許女史は、母校の台南二高女に戻って教鞭を執った。その時、同校の台湾人教員は彼女だけであったという。許女史はこの職場ではじめて日本人との差を痛感することとなる。同じ資格を持ち、同じ勤務内容でも、日本人の給料は台湾



奈良女高師での許春菊女史(後列右から3番目)

人よりずっと高かったのだ。不満を募らせていた許女史のもとにちょうど縁談が舞い込んだので、彼女は2年間の勤務義務を果たすと、退職して結婚した。

夫となった梁炳元氏は、台南・新化の名士である梁道氏の息子であった。梁道氏は嫁選びの際に許女史の奈良女高師での成績を調査させ、彼女の成績がずば抜けていたことを知って縁談を進めたのだという。

結婚後間もなく、夫が満洲医科大学の博士課程に進学することになったため、許女史も満洲の奉天(現・瀋陽)へと渡った。夫は博士学位を取得後、叔父が設立した撫順の天生医院で内科医として働いた。その後独立して医院を開いている。この間、許女史は慣れない土地で習慣の違いに戸惑いながらも、主婦として家事を引き受け、4人の子供を産んでいる。

■ 戦後の混乱のなかで

戦争が終わると、許女史たち一家は台湾へ帰り、夫の実家がある新化に居を定めた。夫は舅から受け継いだ道仁医院で医者をし、許女史は中学教師をしたが、同時に台湾の政情の激変に対応する必要があった。台湾は戦後、中国国民党が統治したため、言語が日本語から中国語へ切り替わった。学校や職場といった公的な場所では、標準中国語を使用しなければならなくなったのだ。許女史は母語の台湾語を話せたが、標準中国語を話せなかったため、一から勉強しなおす必要があった。そこで許女史は子供たちと一緒に児童向け教材を使って学

んだという。また1947年の二・二八事件(日本統治期から台湾に住む本省人が、国民党政府による差別に反発して起こした暴動)の後、国民党政府は多くの本省人知識人を肅清しており、本来なら許女史や夫も逮捕される危険があったが、舅の梁道氏が新化市民のために自ら表に立って政府と交渉をしたため難を逃れた。

■ 政界へ進出

許女史は教師を数年つとめた後、舅の梁道氏の意向により政界へ進出することとなった。舅は日本統治期に新化街の街長をしており、戦後も台南や新化の名士として活躍していたが、その息子である夫は後を継ぐ意思がなかった。そこで舅は才気ある許女史を見込んで政治活動に参加させたのだ。当時、日本留学経験のある女性は極めて珍しく、この経歴は許女史の政界進出において有利に働いた。許女史は1951年に台湾省議会(当時唯一の民選による議会)の議員に当選すると、それを18年間つとめ、1969年からは立法委員(日本の国会議員に相当)を22年間つとめた。実に40年余りのあいだ国政に携わったのである。

許女史は省議員に当選した後、平日は省議会のある台北(後に台中に移る)に滞在することになった。週末に新化の家に帰ると、来客が大勢押しかけた。当時はソーシャルワーカーという職種がなかったため、許女史はあらゆる問題に対応せねばならなかった。例えば夫婦喧嘩の仲裁や嫁姑問題の相談、就職の紹介、また法律問題を解決する手助けをした。その後立法委員になると、許女史は政務上の必要から法律について学ぶ必要があると考えた。そこで再び日本へ留学し、東洋大学法学部の修士課程で学んだ。忙しい彼女は、日本と台湾を何度も往来しながら修士論文を書いたという。彼女の政治家としての活動は多岐にわたり、例えば売春少女の保護をする勵馨社会福利基金会の創立に携わり、理事を務めている。1991年に政界から退いた後も社会参加を続け、キリスト教徒だった彼女は新化長老教会の長老として、亡くなるまで教会のために奉仕した。

■ 妻として、母として

許女史は当時の台湾にあって最新の教育を受けた知識女性であった。しかし結婚後は台湾の古い習慣とも向きあわねばならなかった。例えば舅には正妻のほか、第二夫人、第三夫人がいて、許女史は結婚後に夫の母である正妻と一緒に住むほか、舅と暮らす第三夫人とも付き合いをもつこととなった。複雑な大家族のなかでも彼女はうまく家庭内を取り仕切り、人と争うことはなかったという。また当時の男性によくあったことだが、舅は正妻や第三夫人を殴ることがあった。そんな時、許

女史は舅に向かって「話したら済むことでしょう」と抗議したという。

許女史が政界に進出したのは6番目の子が生まれたばかりの時、さらにその後2人の子を産んでいる。多忙な政務のなか、許女史は「母」役割との両立のため奮闘することとなる。普段の家事については姑や夫の病院の看護師、家政婦に任せていたが、どんなに忙しい中でも絶対に忘れなかったことがある。それは、節句や節目の時に子供たちにプレゼントを買って帰ること。年越しの晩には自分で調理して日本式鍋(すきやき)を作り、家族と鍋を囲むこと。子供たちの誕生日はケーキを買って祝うこと、である。

子供たちと顔を合わせた時には、時間の許すかぎり細やかに教育した。例えば当時の台湾でまだ一般的でなかったテーブルマナーについてしつけた。また学校教育についても、許女史は女性も教育を受けるべきと考えていたので、8人の子供たちを男女の差別なく大学まで進学させた。それは生活の面でも一貫しており、台湾では「お風呂に入るのは男性が先」という習慣があったが、許女史はそうした差別はしなかったという。



夫と姑、8人の子とともに(前列右端)

■ さいごに——許春菊女史と奈良女高師

戦後の台湾では、中国国民党ともに大陸から台湾へ渡った外省人によって政治や経済が独占された。そのため1989年の民主化まで本省人はあらゆる面で差別された。こうした状況のなか、許女史は本省人の利益を代弁する政治家として活躍したのである。そのなかで、より弱い立場に置かれていた本省人女性のためにも力を尽くした。こうした彼女の政治活動を支えたものの一つとして、戦前の女性の最高学府である奈良女高師に留学したという経歴が挙げられる。これにより選挙民の絶大な信頼を得たのだ。家庭においては、許女史は子供に男女の差別なく教育を受けさせ、また調理や洋裁の方法、テーブルマナーがとても洗練されていたという。こうした許女史に対し、娘である梁望恵女史は常々「普通の台湾女性と違う」と感じており、それはきっと奈良女高師で学んだことが活かされているのだと語っている。(羽田朝子)

2011年度のセンターの活動

■センター主催のシンポジウム・講演会・研究会

●公開講演会「性の多様性を考える」

日 時:2011年7月1日(金)10:40~12:10
場 所:奈良女子大学G201
講 師:塩安九十九・森さやか

●特別展示

「沖繩の戦後と女性の暮らし

—古都奈良の記憶から祈りをこめて—
期 間:2011年7月23日(土)~8月3日(日)9:30~16:30
会 場:奈良女子大学記念館講堂、第2展示室
後 援:沖繩市
協 力:奈良女性史研究会

●講 演

「軍事施設とジェンダー

—沖繩と奈良を例として—
日 時:2011年7月29日(金)10:40~12:10
会 場:奈良女子大学記念館講堂
講 師:伊敷勝美(沖繩市役所総務部総務課市史編集担当)
松村徳子(奈良女性史研究会)

●シンポジウム

「軍事施設と女性の暮らし

—古都奈良の記憶から祈りをこめて—
日 時:2011年7月30日(土)14:00~17:00
会 場:奈良女子大学記念館講堂
司 会:吉田容子(奈良女子大学准教授)
講 師:伊敷勝美(沖繩市役所総務部総務課市史編集担当)
松村徳子(奈良女性史研究会)
コメンテーター:菊地夏野(名古屋市立大学准教授)

■センター共催のシンポジウム・講演会

●講演会

「若者に何故HIV感染が広がっているのか
—性的指向と健康問題—」
日 時:2011年8月21日(日)14:00~16:00
場 所:奈良女子大学N101
講 師:日高庸晴(宝塚大学准教授)
主 催:性と生を考える会

●文学部言語文化学科

ジェンダー言語文化学プロジェクト
第5回シンポジウム「ジェンダーとパフォーマンス」
日 時:2011年12月16日(金)14:40~16:30
場 所:奈良女子大学N301
講 演:戸谷陽子(お茶の水女子大学准教授)
「パフォーマンスアートの系譜—アメリカのジェン
ダーパフォーマンスを中心に」
ディスカッション:戸谷陽子、中川千帆(奈良女子大学准教授)、
西出良郎(奈良女子大学准教授)
共 催:ジェンダー言語文化学プロジェクト

●調査

- プロジェクト研究
「帰国留学生のキャリア形成と
ライフコースに関する調査Ⅲ」
- 大学の女性教員数の変動



組織

●センター長

野村鮎子(文学部)

●運営委員

高岡尚子(文学部)
松岡悦子(生活環境学部)
安田恵子(理学部)

●センター員

内田忠賢(大学院人間文化研究科)
大平幸代(文学部)
鈴木則子(生活環境学部)
鶴田幸恵(大学院人間文化研究科)
中川千帆(大学院人間文化研究科)
松岡由貴(理学部)
山崎明子(生活環境学部)
吉田容子(文学部)

●特任教員

羽田朝子

●協力研究員

周一川(日本大学)
ライラ・ママティ(新疆大学)
竹田治美(奈良産業大学)

●事務担当

研究協力課

●連絡先

奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター
〒630-8506 奈良市北魚屋東町 奈良女子大学研究協力課内
Tel:0742-20-3611 Fax:0742-20-3612
E-mail:a-gender.c@cc.nara-wu.ac.jp

編集 後記

今年度、センターが開催した特別展示「沖繩の戦後と女性の暮らし」では2週間で1500名を超える来場者があり、各種のシンポジウム・講演会でも多くの参加者が集まり活発な意見交換が行われました。また長期調査「奈良女子大学女子教員数の変動」(2006~)、「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査」(2009~)でも引き続き成果をあげています。
ニュースレター第11号ではこれらの活動をお伝えします。(羽田朝子)